終戰後一年間の東洋史學界

波多野善大

敗戰は我が國のあらゆる分野にわたつて深刻な改造を要求してゐる。我々の住つてゐた國家は、從來とても多少は氣づかぬではなかつたが、明治以來急造されたバラック式近代建築であつたことを、それがこの未曾有の大暴風によつて無慘に打倒されて、はじめて身にしみて痛感させられたのである。我々は、いま廢墟にたつて、未來の我々の住家を再建するためのいとなみにいそしんでゐる。今度こそは舊轍をふんではならない。そのためには、あらゆる領域において、徹底的な批判と研究がなされる必要がある。そしてこの場合もつとも心すべきことは、一切の例外を認めず、一時のがれに逃避することなく、純粹に合理主義の立場にたつて、あるべき道を大膽率直にみきわめることである。

かういふ必要は、中國研究の領域においても例外ではあり得ないこと勿論である。純學術的文化的な關心以外において、從來の中國研究を意識的無意識的に支持してゐた大きな地盤は二つある。第一は、我が國の文化史的な中國との關係と、明治このかた近代的なよそほひの底に殘された封建的體制とに起因して、わが國民の間に深く根ざしてゐた漢學的教養と儒教的教學乃至道德であり、第二は、明治以來の中國に對する經濟的武力的進出のための經濟的政治的關心であつて、この二つ地盤から、中國研究はその經濟的精神的支持を多分に受けて發展してきたのであるとともに、一方また多分にその拘束をも受けてきたのである。ところが、敗戰およびそれに伴ふ革命的改造によつて、そのいづれもの地盤を失ふことになつたのである。もちろん漢學的教養への要求のみは俄かに無くならないだらうが、遠からず影が薄くなつて行くだらうことはたしかである。だから、將來の中國研究を刺戟するものは純學術的文化的關心以外の何物でもなくなるのであるが、それはまた、何物にも制約されることなく、全く學術的文化的關心によつて中國研究ができるといふ自由な地盤が得られることになつたのであつて、この點中國研究に從事するものにとつて喜ばしいことである。

では中國研究の一翼をなす中國史の研究は、今後どういふ方向に進むであらうか、否進まねばならぬだらうか。それは結局において研究對象と研究方法と發表形式の三つにわたつて、從

來我々のとり來つたものを批判反省することによつて明かになるだらう。

研究對象においては、王朝およびそれをめぐる下臣の歷史を支へてゐた庶民の生活に眼を向けねばならぬことは當然である。元來中國史の史料は、帝王及びそれをめぐる臣僚乃至はそれを育む地盤である文字の階級所謂士大夫階級の記錄であつて、庶民の側からの記錄は殆んど存しない。だから庶民の歷史の究明には非常な困難を伴ふことはやむをえない。加藤博士の開拓された道に沿うて、近來、經濟史社會史方面の研究が相當盛になつてはきてゐるが、將來はこの方面特に庶民の經濟史社會史の研究に主力をそゝぎ、華かな王朝の歷史や文化を可能ならしめた地盤である庶民の生活史を明かにせねばならない。これと關聯して考へられることであるが、思想や藝術の考察においても單にその思想や藝術それのみを、それを生んだ社會的經濟的地盤から切離して論ずることは、充分な考察とはいへない。

研究方法については、中國史に志すものの間で從來餘り問題にされなかつた。科學的な中國史研究のために、我々のかかる從來の態度は深く反省されなければならない。將來の中國史の方向が、庶民の生活史の究明に向はねばならぬといふ上述の對象についての結論が容認される限り、その研究方法は必然的に社會史經濟史の方法をとらねばならぬことは明かである。我々は、社會史經濟史に關して世界の先覺の殘した業績について、できる限り廣い教養を積み、その廣い視野をもつて中國史にのぞみたい。これはつまり世界史的な立場に立つて中國史を究明しようとするものであつて、これによつて中國史を規定してゐる世界史的普遍性と中國的特殊性とを解明することができるのである。しかし歷史は史料に基く實證を離れては成立たない。廣い視野を持つことは、この史料の批判や解釋がより妥當性を得るために必要なのであつて、安易な公式主義に陷ることは充分警戒せねばならない。

かうした對象と方法がとられることによつて、中國史はその後進性や骨董趣味的臭氣を克服して、ヒューマニステイックな清新なものとなり、若い世代の人々の心にふれる力のあるものとなるのである。しかし最後に發表形式についての反省が殘されてゐる。

てつとり早く云つて、中國文の引用によつて論をすゝめる形式に反省を加へることである。中國史の論文は一般にとつつきにくい。これは中國史を專門とする者の間においてさへ感ぜられることである。無學なと笑つてはいけない。これは中國の文字と文章の性質上からくる必然の結果であつて、だからこそ中國においても訓詁學の成立する餘地があるのである。だからなまの引用文によつて叙述を進めることは結局獨りよがりになり、その主旨を他人に充分理解させることができない結果になるのである。そしてそのために他人から充分な批判を受けられないことになつて、遂には學界の發達を阻害することにもなる

のである。この意味から、將來の中國史の論文の發表形式に、かゝる缺點を除くための何等かの考慮が拂はれなければならぬと思はれる。さうすることによつて、專門家は勿論のこと、專門外のものにも近づき易くし、中國史の研究を一部專門家の專有から解放して、中國史學界の向上發展の道を開きたいと思ふ。

自己批判がながくなり過ぎて、與へられた餘白が少くなつたから、以下大づかみに終戰後一年間の東洋史學界を展望することにしたい。

敗戰によつて東洋史關係の諸雜誌が整理され、東亞經濟研究、支那研究、支那、滿蒙、東亞、滿鐵調査月報、書香、東亞經濟論叢、等が廢刊されたのも、その立つてゐた地盤の消滅からくる當然の結果である。東洋史關係の純學術雜誌で戰後もひきつづき刊行されてゐるものでは、史學雜誌が五十六編五、六七、八の四號を、史林が三十卷三、四の二號を、支那學が十一卷四號及び十二卷一、二合刊號の二册を、史淵が三十五輯および三十五輯の二册を、京都の東方學報が第十五册二分をそれぞれ出してゐるが、その他は全くなりをひそめてゐる。これらの所謂純學術雜誌が、戰後の出版界から敬遠されてゐる原因については、その當事者において深い批判が必要である。それは單に、純學術雜誌は一般うけがしないといふ月並な安易さで片づけられるものではない。既に刊行をみたそれらも、謂はば終戰前の惰性によつたものであつて、敗戰後の向ふべき道を反省的に見きわめて、その志向を誌面にもつたものではない。たゞ史學雜誌五六の八に發表された板野長八氏の「荀子の思想」は、その取扱ひ方と叙述の形式に自己批判のあとがうかがはれる。また支那學十二の一、二合刊號に故中江丑吉氏の未定稿「尚書概論」がのせられてゐるのは注目される。自分は素人だからこの未定稿のもつ意義については何事も云へないが、それは恐らく氏の本領を發揮したものではなからう。氏の遺稿は岩波から出版される豫定らしいし（「世界」第十號、松方三郎氏「中江丑吉のこと」）支那學誌上にもなほ遺稿が準備されてゐるやうだから、それ等の勞作に期待してゐる。

我々の「東洋史研究」も終戰後新一の三及び四を出し、つづいてやつとの思ひで本號を世に送るが、これらは何れも前記の諸雜誌と同じ道をふんだものであつて、未だ深い批判を經たものでないことを告白せねばならない。我々は、いま自己批判のさなかにあるから、いづれそれが具體的に本誌に現れることになるだらう。

なほうわさに聞くところによると、東大の東洋史研究室からは新しく「東洋史學」を發刊する準備が完成してゐるらしいが、我々の學界のために衷心より期待をかけてゐる。

戰後復刊されたものには「歷史學研究」「中國文學」、「東洋文化研究」があり、新刊されたものに「新中國」「中國評論」「新中華」「月刊中華」「歷史評論」があり、「東亞人文學報」が「人文科學」として再生してゐる。「中國文學」「新中國」「中國評

論」「新中華」「月刊中國」は現代中國の文學、經濟、政治の面にタッチし、生々しい新鮮さを持つてゐる。「歷史學研究」や「歷史評論」は所謂オーソドックスの史學に對して社會科學の立場を鮮明に示してゐる。「歷史學研究」は、もともと講壇史學に對する不滿から、進步的な若い學徒によつて創刊されたのであつて、その初期における活躍はめざましいものがあつたが、時代の波にいつかその鋭氣をすりへらされてしまつたのであつた、復刊された「歷史學研究」は、まさにその誕生當初の姿に、復歸したものといへるだらう、過去の愚を再びくりかへすことなく、まさにあるべき史學への道をひたすらに求めてくれることこそ望ましい。

なほ此の方面のユニークな存在として「學海」をあげておかねばならぬ。中國研究の業績を一般社會に紹介しようとの意圖から結成されてゐる東方學術協會の編輯であるが、そのユニークな存在なればこそ今後の發展が切望される。

戰後の傾向として是非ともここにふれておかねばならぬことは、從來學の壟にたてこもつてゐた人々が、ジャーナリズムに顏を出すことが多くなつたことである。これは經濟の攻勢に對抗するための外延的いとなみの現れであるが、それによつて學の世界が解放される機會になつてゐることはたしかである。

なほこゝで注目されることは、本年一月平野義太郎氏の下に大なスタフを結集して發足した中國研究所の活躍であつて、その成果が遠からず何等かの方法で發表されることが期待される。

單行本はその種類も少く、その調子も高いものとは云へない。加藤繁博士の「秦の始皇その他」、石田幹之助氏の「長安故古」の二つが日本文庫におさめられて生活社から刊行され、長廣敏雄氏の「北京の畫家たち」、今井淸氏の「中國物理雜說」、青木正兒博士他四氏の「東亞に於ける衣と食の」諸書が東方學術協會の編輯によつて全國書房から出され、村田治郎博士の「東洋の建築」が京大厚生部から、梅原末治博士の「東亞の古代文化」が養德社から刊行された。また內藤博士の舊稿を集めた「先哲の學問」が弘文堂から、吉川幸次郎氏の同じく舊稿を集めた「支那について」が秋田屋からそれぞれ出されてゐる。少し趣の變つたものでは、幕末に高杉晉作等とともに上海に航した綿貫介次郎、日比野輝寬二人の日記を、貝塚茂樹、日比野丈夫兩氏が集め、外山軍治氏が解說を附して「文久二年上海日記」として全國書房から刊行されて日本史東洋史兩學界に新史料を提供した。また永年雲岡の調査に從つてゐる水野淸一、長廣敏雄兩氏がその研究の一班を世にわかつために「大同の石佛」を座右寶から出した。水野氏の撰定したすばらしくよく撮れてゐる四十葉の寫眞に、長廣氏が解說をした小じんまりした寫眞集である。

戰後の一年間では新しい價値意識に立脚した力作を完成することは不可能だし、戰爭中のものは戰後の批判に堪へることができず、隨つて商品價値の觀點から書店が敬遠するなどの關係

があつて、この一年間には大著の名に値するものは二つしかない。平岡武夫氏の「經書の成立」(全國書房刊)と小野勝年、日比野丈夫兩氏の「蒙盤考古記」(星野書店刊)とがそれである。しかしこの兩書とも、嚴密な意味では戰後の著作とはいへないものである。

「經書の成立」については、既に歴史學研究の復刊第一號に紹介されてゐるが、それは仰々しい書きぶりにも似ず、内容の一向ない見到ちがひのものであるのは遺憾である。「經書の成立」は、平岡氏が、從來の經書研究家の態度を一擲して、「經書は、支那精神史の關頭において如何なる契機をもつて誕生したのであるか」の問題をとりあげ、前人未踏の、しかも經書研究の根本的領域を開拓せんとする意圖から生れた野心的な勞作であつて、そこにすでに問題の書たるの運命をになつてゐる。氏は、五經や十三經に總括されてゐる經書を批判して、經すなはち「萬世にわたり普遍妥當な道」を内容とする最も純粹なる經書を求めて、孔子においてさへ既に經書として與へられてゐた「詩」と「書」を得、進んでこの兩書を批判して最も根元的な經書は「書」であるとの結論に達した。ここから更に「書」が何故に最初の經典たり得たかの問題の究明にすゝむ。そして中國に於ける最古の記錄である龜甲文や銅器の銘、竹册の册命の本質をつくことによつて、中國において書かれたものは「王者の記錄であるとの獨創的な見解を明かにし、「書」はこの書かれたものの本質につらなるものであるとの見解に達する。しかし「王者の記錄」である「書」が何故に理念の書たる經書になり得たか。氏は「書」の原初的なものである周初の五誥をとりあげ、周初の社會に基き、その内容が民族の經典となるにふさはしい理念に一貫されてゐることを明かにし、この理念が周室の衰亡に際して、盛周を顧念する人々によつて認識されるに至つて「書」が經典として成立することになつたのであることを結論するのである、

氏の論究はまことに精緻であり、理路はまことに整然としてゐる。しかも常に歴史的なヒューマニスティックな取扱ひの態度のゆえに經學に素人である自分にも一氣に通讀を許す程の魅力を持つてゐる。經典「書」の成立は、氏のいふ如く周室の危機に媒介されてゐる。しかしそれのみで「書」が經典たる地位を得たのであらうか。周室の立つてゐた社會的地盤は動搖して周室は滅んだが、その地盤には質的な變化がなかつた。隨つてその地盤の上に成立した漢帝國は、また「書」を理念の書として再確認することができたのである。かくて清末に至るまでの(現代においてさへも)中國社會が、周初の社會と本質的に異らなかつたために、王朝の興亡はあつても新王朝は必然的に「書」のもつ理念をその都度再確認せざるを得なかつたのである。かゝる再確認すなはち兩成立が「書」を理念の書として生き續けさせたのであつて、この再成立を無視して「書」の隨つて「經書の成立」が考へられるだらうか。社會の本質的同一性(それは經濟的地盤の本質的同一性に基くものであるが)が、王朝の興

亡とは無關係に周初の理念として生き續けさせたのであつて、こゝに平岡氏のいふ周初より清末に至る天下的世界觀の時代がなりたつ根底があり、經書が氏の評價する如き重い意義をになう理由があるのではなからうか。このことがもし認容されれば平岡氏の究明した經書成立の契機は原初的なものと云はねばならぬことになるであらう。

「蒙疆考古記」はさる昭和十七年の夏から秋にかけて、小野、日比野兩氏等が大同近傍の陽高において漢代の古墳を發掘した際の發掘經過の記錄である。しかしそれは在來のものとは趣を異にし、發掘日誌を基礎にし、學的に調子の高いものを興味深く讀むことができ、將來この種の分野における望ましい一つの型を暗示するものといつていゝ。素人の自分には、その中にもられた學的意義についてはとやかくいふ資格はないが、中國本土における日本人の手による數の少ない漢代古墳の發掘であるから、學界に與へる貢獻はけだし大きなものがあるだらうといふことは想像される。その上戰後の窮屈な狀勢にもかゝはらず、多數の鮮明な寫眞や圖版がもられてゐることは、此の書の價値を一段と高めるものである。

戰後の中國の史學界については知るよしもないが、蔣介石氏の「中國の命運」(波多野乾一氏譯、日本評論社刊)と、毛澤東氏の「新民主主義論」(內田文夫氏譯、人民社刊)その他が紹介されたことは、種々の意味で注目される。

以上のべたところによつて明かな如く、京都は非戰災都市としての恩惠に幸されてゐる。これを思ふとき、焦土のちまたに學に精進する同學の人々に滿腔の同情と敬意を表さなければならない。

これを要するに、戰後一年間の東洋史學界は、見きわめた理念に向つて勇敢に前進を開始した一部をのぞき、大勢は、前途に幾多の問題を意識しつゝも、加重する生活とのたゝかいをひかへて、歩みなれた道を物足らぬ思ひをひめづゝさまよつてゐるといへはしないだらうか。

(二一、一一、一九)